

中国60年代と世界

第2期第6号(通巻第13号) 2018.1.23

発行人 〈中国60年代と世界〉研究会(幹事・土屋昌明)

編集人 文革50周年再検討会編集グループ

〒214-8580川崎市多摩区東三田2-1-9603 tuwuchangming@yahoo.co.jp

例会報告：林昭と星火事件の中国精神史上の意義とは…(1)／コメント…酒井規史・矢吹晋(3)／今後の研究会予定…(3)／書評：浅川史『魯迅文学を読む 竹内好『魯迅』の批判的検証』…前田年昭(5)／胡傑監督『林昭の魂を探して』字幕(その5)…土屋昌明編訳(9)

例会報告(12月16日)

林昭と星火事件の中国精神史上の意義とは

2017年12月16日(土)午後14時50分から専修大学神田校舎204教室にて、本研究会12月例会(専修大学視覚文化研究会と共催、一般公開)を開催した。テーマは「反右派運動と地下出版物事件「星火」の重要性」、次第は15時から胡傑監督のドキュメンタリー『星火』を上映、16時30分から傅国涌の研究発表(通訳は土屋)、そのあと翰光のコメントであった。本研究会からは矢吹・朝・王・翰光・酒井・島本・土屋が参加。

『星火』の上映については省略する。傅国涌の発表内容は大略次のようであった。

星火事件を考えるためには、まず1960年前後の大飢饉当時の農村の状況について認識すべきだ。楊繼繩『墓碑』(日本語訳は伊藤正ほか訳『毛沢東大躍進秘録』文藝春秋社、2012年)でとりあげられている問題の一つに、大飢饉当時、小規模の暴動があったが、激しい反抗がおこらなかった点がある。陝西興平県、宝鶏市、西安市雁塔区で1960年に116回の「反動」的な標語と手紙がみつかった。1958年から1962年に、雲南・貴州・四川・青海・甘粛などで飢餓が原因の小規模の暴動があった。1960年6月、貴州江口県で10万人中4万人が餓死した事件があり、暴動がおこったが、先頭に立ったのは公社書記だった。倉庫から糧食を配布した県委書記はピストル自殺、糧食の生産量をいつわって民衆の暴動をまねいた県委書記は川で投身自殺をした。高玉凌『中国農民反行為研究』(香港：中文大学出版社、2013年)では、人々の態度は反抗には至らず、弱みにつけ込む、人を騙す、コソ泥をやって生き延び

る、などの行動で占められている。フランク・ディケーター『毛沢東の大飢饉』(日本語訳は中川治子訳、草思社、2011年)も同様な観察を示している。何方『從延安一路走来的反思(延安から歩んできた道の反省)』(香港：明報出版社、2007年)によれば、大飢饉の原因が毛沢東にあることを一般農民まで認識していた例がある。その一方で、『毛沢東生活檔案』(中共党史出版社)1961年4月26日のメニューには、七大西洋料理コースなど百種類以上があげられており、その差に驚かされる。

星火メンバーは、1959年5月から1960年1月にかけての経験から、1959年12月に顧雁が『星火』の発行を提案した。彼らは、蘭州大学・知識分子・甘粛という限界を突破しようとした。星火の中心人物は顧雁と張春元である。胡傑は、顧雁からインタビューを拒否されたので、ドキュメンタリー『星火』の中心人物は向承鑑と譚蟬雪になっており、作品と真実とのあいだには差異がある。星火の発行の辞は顧雁が書いたもので、そこで彼は平和と民主の社会主義を提案している。彼らはつながりを、蘭州大学の学生たちからそれ以外の人たちへ、天水にいた知識分子から武山の人民公社幹部へ、甘粛から上海・広州へと拡げた。上海には林昭、広州には梁炎武、天津には徐長昆、農村幹部には杜映華と羅守志がいた。60年1月から6月までの半年が主たる活動期間だったが、そのなかでも、組織を作るかどうか、基本理念をまとめるかどうかで意見の違があった。連絡は、武山では苗慶久と向承鑑が中心、天水では張春元と胡曉愚、上海では顧雁、林昭は北京大学と

の連絡、向承鑑は杜映華との連絡をした。そのほかに、全国の省レベルの幹部のリストを作ろうとし、国外への連絡のために譚蟬雪が香港へ出ようとした。この動向のなかで、林昭の役割は非常に消極的だった。組織を作ることに賛成せず、宣言を発表することにも賛成しなかった。彼らのこうした行動に中国の神話の言葉を想起させられる。できないことをやろうとする、この点にこそ彼らの行動の精神的な意義がある。反抗が存在しなかった時代に、反抗のための具体的な基地を作ろうとした点だ。彼らの思想的資源は『毛沢東選集』にある。年齢的にも20代で思想的資源が欠乏していた。『星火』の目次からだけでも、彼らの言葉が毛沢東にもとづいていることがわかる。それに対して林昭の読書範囲は広い。『世界各国民権運動史』、西洋の政治思想、中国古典の造詣があった。彼女は、北京大学ですでに学生詩人であり、雑誌『紅樓』の編者だった。『世界各国民権運動史』には、日本の明治維新以後の議会制民主主義の成立についても紹介がある。おそらく林昭への影響があっただろう。55年から57年にかけて彼女は北京大学の学生詩人として活躍した。彼女の家庭環境も一般とは違う。父親は国民党の幹部、母親は国会議員にあたる役職だった。

60年5月にメンバーで最初につかまったのは譚蟬雪、その2ヶ月後に張春元、1960年9月に天水と武山で大規模な逮捕があり、武山で33人がつかまった。1960年10月に顧雁は上海で、林昭（彭令昭）は蘇州で逮捕、徐長昆が天津で、北京大学の梁炎武が広州で逮捕。林昭は、星火の主たる活動には参加しておらず、受け身で巻き込まれた。「個人思想歷程的回顧と検査」（1961年10月14日）で星火事件における自分の思想点検をしているが、そこでは星火メンバーの選択した行動を承認していない。林昭の思想は彼女の詩にみるべきだ。今回初めて紹介する、彼女が獄中で書いた詩「美呵」（1961年6月27～29日）には、美に対する追求、現実の醜悪を受け入れられない、生命をひきかえにしても美を追究するという彼女の考えがみられる。彼女の精神的意義は、反抗が美に対する追求だったことだ。不公平などの現実的な醜悪に対して抵抗することが美の追究になる。

林昭は、当初は星火メンバーの組織化も意見の印

刷も反対だったが、62年にいったん釈放されると、星火のメンバーが投獄されている状況で、それまでとは相違する過激な考えを抱いた。「中国共産主義者青年戦闘聯盟」という組織を蘇州で立ち上げた。メンバーは林昭と黄政の2人。このため、彼女は再び投獄され、懲役20年となった。その後、獄中で髪は白くなり、「提籃橋の白毛女」と呼ばれるようになった。もし林昭がいなかったら、星火のメンバーの行為はたんなる地方の反革命事件と扱われたにすぎず、精神的な意義を持つにいたらなかっただろう。あるいは現在でもその事件の存在は知られていなかっただろう。たとえ星火の事件が見いだされたとしても、人々の関心を引くことはなかっただろう。人はみな林昭という個人に関心を持つのであり、星火というグループにはではない。

しかし、星火のメンバーにも顧雁という人物がいて、いまも健在だ。彼は、釈放されてから蘭州大学と中国科学技術大学で物理学の教授となり、物理学の発展に貢献した。これは、彼が刑務所内で翻訳や論文の閲読ができたことによる。やはり一つの奇跡的なことだ。

開放出版社『三十年備忘録』序言で蘇曉康が「反抗者の学習曲線」ということを言っている。反抗者が権力をにぎって独裁者に変化する曲線ではなく、反抗者が建設者へと変化する曲線、その思想の転換と役割の定位について考えなければならない。林昭と星火グループの精神的意義を考えることは、とりもなおさず、創造的な「反抗者の学習曲線」を探索することであり、大きな歴史的課題となるだろう。

以上は傅国涌の発表の概要である。続いて翰光は、傅国涌の発言を補う意味で、大飢饉と文革・習近平とのつながりについて、香港中文大学で調査した未公開資料にもとづき、次の2点を紹介した。第一に、大飢饉のあと、1961年、劉少奇によって政策の転換があり、七千人会議で毛沢東は権力を失ったので、文革を考えた。これを説明する資料が多く存在する。第二に、1967年、アルバニアの軍事代表団に文革を実施した動機を毛沢東が語っている資料がある。それによれば、当初から劉少奇の打倒が文革の目的であったこと、文芸の批判から紅衛兵、造反有理などの展開を毛沢東が当初から考えていた

こと、などがわかる。習近平とのつながりでは、習は毛沢東のまねをしたがり、たとえば文革のときの工作組のように、既成の権力構造の上にそれを指導する機構を作る。紀律検査委員会だけでは足りず、汚職をとりしめる法律を作ろうとしている。委員会の対象は党員だったが、法律にすれば、公務員ほか全国民が対象になり、あたかも日本の治安維持法のような恐怖政治のかたちになる。独裁者は優秀な後継者を嫌う。全国を画一化させたい、外見的に独裁者の美意識に画一化したがる。かつて北京から右派を追放したことがあるが、最近、貧困者を北京から退去させた。以上のように、大飢饉から文革への現代史は、現在ともむすびついており、この点の認識が大切だ。

フロアからは、詩人としての林昭という側面を傅国涌が指摘したことを高く評価する意見が出たほか、ドキュメンタリーで証言している人たちへの政治的抑圧の問題、現代中国における言論の自由の問題などが質疑された。(文責：土屋昌明)

時代との齟齬

酒井規史

傅国涌氏の発表の中で最も印象に残ったのは、林昭と蘭州大学の右派学生たちとの違いを述べた箇所である。曰く、林昭は父母も知識人で一般的な家庭環境ではなく、西洋の文学と中国の古典にも通じていた……。つまり、林昭は人民共和国成立以前のインテリの気風を受け継いでおり、右派学生たちとは教養のレベルが違うというのである。

それに対し、『星火』はそもそも雑誌名が毛沢東作のフレーズに由来し、右派学生たちは毛沢東の言葉を用いて毛沢東と共産党を批判していた。林昭が『星火』の刊行に反対だったのは当時の政治的・社会的状況を考えてのことであろうが、右派学生たちの能力の限界を察知していたのかもしれない。鋭敏な感性と激しい気性を持った林昭にとって、波乱の生涯は必然だったとも思える。しかし、当時においては時代との齟齬の度合いが大きすぎて、それが悲惨な最期につながったのではあるまいか。一個人と時代との切り結び方について、あらためて考えさせ

られた。

作家傅国涌が掘り起こした詩人林昭像

矢吹晋

土屋昌明氏がリードする文革研究会の活動は実に精力的で、その内容の充実ぶりはまことにめざましいものがある。私自身はそれほど熱心な参加者ではないが、老人にありがちな居眠りを一度としてしたことがないのは、報告者の新発見にいつも引き込まれるからだ。

旧臘12月16日の傅国涌さんの報告「不可能を知りつつ、これに挑む一彭令昭と『星火』の精神上の意義」を聞いて、私は重要な「素材」に接して、改めて私自身の林昭解釈を根本から再修正することになった。実は『会報』で、江雪報告に基づいて林昭イメージを修正したばかりなのだが（「江雪報告を聞いて」第二期第五号）、傅国涌報告に接して、もう一つの決定的な修正を迫られた気分である。少しボケた映像として残されていた細部（核心、神は細部に宿る）がクリアに描かれるのは実に快い。『星火』1号、2号で発表された重要な論稿のほとんどが『毛沢東選集』のタイトルそのものであること、彼らは同じタイトルを用いつつ、毛沢東自身を批判したことは『星火』の油印誌タイトルだけから見ても明らかであり、かねてその意味を考えていたことだが、こういう導入から丁寧な解説されると、すっきりと脳味噌に収まる。結論は中国の神話「夸父(カホ)逐日(チクジツ)、精衛(セイエイ)填海(テンカイ)(ともに典拠は山海経)」である。林昭の詩プロメテウスが「夸父逐日」と重なり、毛沢東の愚公移山が「精衛填海」そのものであることが細部の実証を重ねた末に疑うべくもない真実として、聞き手の前に立ち現れる。

傅国涌は何方『從延安一路走来的反思』の記述と『毛沢東生活檔案』の記述を対比する。何方老は去る10月3日未明94歳で死去した。私が北京滞在中のことで、友人から協和医院で行われた遺体との告別の模様を「写真つき微信」で詳しく聞いている。何方老ご本人と話した記憶が甦える。それは一度だけシンポジウムで会った時のことで、集合写真中央に

彼が立つ一枚は書斎のどこかにあるはずだ。

さてヒロイン林昭だが、反右派闘争という政治闘争の犠牲者という文脈から類推される、「政治人間」像から彼女を解き放ち、詩人林昭のイメージを浮かび上がらせたのは、傅国涌の功績として特筆に値する。詩人としての感性こそが彼女のすべてであることを実証して、説得的である。北京大学の老師游国恩（楚辞研究者）が彼女の文才を愛したこと、彼女が『星火』の印刷や組織作りに反対した事実等々は、すべて政治的反対派というよりは詩人的体質による

という分析は、きわめて説得的な解釈だ。そのような感性の持ち主であるゆえに、長期の投獄で精神を病み、自らを投獄する責任者柯慶施（上海市書記）宛てに情書もときを書いた錯乱も納得がいく。中学受験の国語入試に林昭の名が露出された事件も、文学の力が政治の壁を破った事件として記憶に値する。詩人は永遠に若い。亡き詩人にこれだけ肉薄できる傅国涌の筆力にも感嘆する。多分、これも牢獄で鍛えられた精神力なのであろう。（2017.12.18）

今後の研究会予定

2月例会

2月22日(木) 午後7時～ 専修大学神田校舎(教室未定)

土屋昌明「2017年度の研究成果と今後の展望」

〔(20)ページからのつづき〕

黄政：昨天晚上死的，啊，黄政，今天有五个，五个我们就去十人，十个右派。把他们自己的被子包一包，拿来根草绳两边扎一扎，外边再用麻绳，一个套在脖子上，一个套在脚上，两个人拿着一根长毛竹，这么粗的毛竹，哼叱哼叱，抬几里路，抬到西支河边，西支河，挖了坑，埋掉，叭、叭、叭，把他们埋掉。埋掉了有一个土包包。好，你埋掉了，老百姓都有看好了。一个、二个、三个、四个、五个、六个、七个、八个、十个、二十个、三十个、四十个，等你走掉以后，他把那些才埋好的人翻出来，翻出来他要什么呢？要衣服，要被子，苏北的老百姓穷的连被子也没有。那时我们也知道，不是天灾，这完全是政策上的失误。

黄：「昨晚の死者が、おいおい、今日は5人もいるぞ」と言うので10人の右派でやる。彼らの布団で包み、縄を持ってきて両側をくくり、外側をもう1回麻縄で、一つは首を、もう一つは足をくくる。2人で竹棒をかつぐ、こんなたいやつだ。エッホエッホと何キロか担いで、西支河岸まで運ぶ。西支河だ。穴を掘り、ざっざざっと埋める。埋めると土饅頭が一つできる。埋め終わるのを近隣の者がじっと見ている。1人2人3人4人…8人、10人20人…40人。埋め終わって帰ると、埋めたばかりの人を彼らが掘り返す。掘り返してどうするのか？服と布団をとる。蘇北の百姓は困窮して布団すらないんだ。その時わかった、

これは天災じゃない、完全に政策上の失敗だと。

098

原資料片图像与解说：1962年9月24日至27日中共八届十中全会在北京召开，毛泽东在会上讲话，发展了他在1957年反右斗争以后提出的无产阶级同资产阶级的矛盾，仍然是我国社会主要矛盾的观点。进一步断言在整个社会主义历史阶段，资产阶级都将存在，和企图复辟，并成为党内产生修正主义根源。

原資料の写真と解説：1962年9月24日から27日に中共第8回十中全会が北京で開催、毛沢東は講話をし、1957年の反右派後に提出した、プロレタリアとブルジョアの階級矛盾は、依然として我が国の主要矛盾だとする観点を発展させた。社会主義のいつの歴史的段階においても、ブルジョア階級は存在し復活を企図し、党内に修正主義が発生する根源になると断言した。

会议公报

会議公報

〔次号につづく〕

書評：浅川史『魯迅文学を読む 竹内好『魯迅』の批判的検証』スペース伽耶、2010年

伝説を打破し、ナショナリスト竹内好の本質を暴露した戦闘的論証！

前田年昭

本書の眼目は、副題のとおり「竹内好『魯迅』の批判的検証」である。著者も「はじめに」で書いている。「わたし自身が直接魯迅文学から読みとった魯迅像——ありうべき魯迅観や魯迅文学観——を展開するにあたり、必要な範囲で中国における魯迅論にも触れながら、「日本的」な魯迅論の原点をなす、竹内好の『魯迅』を批判することからはじめたい。『魯迅』をできるだけ詳しく分析することにより、竹内の魯迅論がどのような発想や論理、あるいは思考や思想にもとづいて組み立てられているかを、明らかにしたい。」と。

すでに、山口直孝による的確な書評「直言の力をわれらがものに」（『社会評論』166号、2011年7月）が出ていることを後追いで知ったが、後に述べる理由により、ここにあって書評する。

著者は、第一章「魯迅文学の出発点と基本的性格」では、魯迅の基本的な文学観に対する竹内の改竄を裏証的に批判している。魯迅自身、仙台の医学専門学校で見た幻灯で「愚弱な国民は〔略〕せいぜい無意味な見せしめの材料と、その見物人になるだけではないか」として「中国民衆の精神改造のための文学」を志したと述べている。にもかかわらず竹内は「ともかく、幻灯事件と文学志望とは直接の関係がないというのが私の判断」と独断的に否定し、「屈辱感」と「孤独感」、「絶望」と「贖罪」の文学として規定する。これは竹内の文学観であっても魯迅の文学観ではなく、暗黒や虚無は中国社会の現実の、リアルな反映なのだ。著者の批判的裏証はさらに竹内が魯迅の「文学的自覚」の時期を確定できないだけでなく、内容と性質も見定められないことを容赦なく暴き出した。

第二章「魯迅文学の本質をめぐって」では、魯迅「革命時代の文学」を手がかりに、竹内が魯迅に「文学無力」説を押しつけて、自らの文学絶対観を述べているにすぎないことを論証している。しかし魯迅が立証したとおり、文学を志す者はすべて人間や社

会に関心を抱いているからこそ作品を拵えるのである。批判を「竹内は、『魯迅』を書きあげることにより、〔略〕「生の自覚」を得ることはできたかもしれない。しかし、その作業をとおして竹内は、ついに、かれ自身を変革する契機をつかむことはできなかった。」としめくくっている著者に、評者は全面的に同意する。

第三章「魯迅の創作に即して」では、魯迅の作品を「苦しみの棄て場」だったとして阿Qを魯迅の化身とする竹内の見方を徹底的に批判するとともに、阿Qの奴隷根性を不変のものとする民衆観を示す竹内芳郎、今村与志雄、佐々木基一、丸山昇、尾崎秀樹、竹内実らを批判の俎上にのせている。魯迅にとって民衆は変わりうる存在であり、著者は革命的民衆の原像例としてとくに、竹内が失敗作と評する「小さな出来事」の車夫を挙げており、これには評者は、我が意を得たりとの思いを強くした。

第四章「雑感の世界」では、小説（創作）とともに魯迅文学を構成する二本柱のひとつである雑感（雑文）の意義、第五章「国防文学論争とはなんであったか」では、文学の階級性をめぐる文芸家協会批判における魯迅の立場——が、それぞれ明らかにされている。国防文学論争を「無意味な対立」と断じた『魯迅』の竹内好と、「大東亜戦争」支持の「宣言」を書いた竹内好との思想的対応が論証され、『魯迅』を日本軍国主義に対する抵抗の書としてきた旧来の伝説がいかに実態にそぐわぬか明確にした。

第六章・第七章「魯迅文学の革命性（正・続）」では、瞿秋白の「魯迅論」（本書巻末に安里眼による訳を併載）の意義が強調され、『野草』にあらわれている魯迅の「暗さ」は、思想の強靱性、戦闘性など魯迅の革命精神からくるものであることが明らかにされている。「マルクス主義的観点に立つ魯迅論にたいする実存主義的観点からの「批判」の余地を残さないためにも、正確かつ精密な魯迅論の構築が急がねばならない」との著者のしめくくりは、

今後の闘いの方向、私たちへの課題を提起している。

全体をとおして明らかにされたことは、竹内好の階級的立場が、近代主義的ナショナリズムだということである。実証にもとづく著者の論断の正しさを裏づけるもうひとつの事実として、評者は、竹内好が植民地からの独立という中国革命に対しては「同伴者」とはなりえても、自己変革を社会変革と一体のものとして問うた文化大革命に対しては決して理解しえなかった点を指摘しておきたい。

すばらしい本である。出てから七年も知らなかったことが悔やまれる。読み進むにつれて同じことを考えていた方がいたという驚きと喜びで鳥肌が立つほど震え、また奮えた。「長くあたためてきた論旨に先行論のあったことをどう思うか」「先陣を切れず残念ではないか」と尋ねた仲間がいたが、私は答えた、「喜びのみだ」と。先に出されたからどうこうという昨今の研究者的発想は、個人主義、功利主義でしかない。世の中がブルジョアジーとプロレタリアートとの二大階級に別れているかぎり、すべての事物はどちらかに属しており、こちらでなければあちらなのだ。日本階級闘争に害悪を流し続けている竹内好に対する批判は、プロレタリア陣営にとって必要な、共同の課題のひとつである。本書は、ナショナリスト竹内好を徹底的に批判する階級的な共同事業の号砲となった。魯迅論に対する批判から中国革命と毛沢東思想の歪曲に対する批判へ、さらに竹内による「アジア主義」への批判へ、批判と闘争を深めることが必要である。

読書は、とくに学問を志す立場からは、自分の考えとの相互批判（対立物の闘争）である。すなわち自分の考え、先入観が間違っていたのか、正しかったのか。出会った本の考えを受け入れて自分の誤った考えを改めるのか、出会った本の考えを我が意を得たりと同意し補強するのか、出会った本の考えを誤りとして批判するのか、メリハリがなければならぬ。魯迅とその作品について、正面から向き合った読書が今こそ必要である。

私は、2016年3月に「魯迅邦訳の比較をとおして、自省（反省＝闘争）の力を考える」を『中国60年代と世界』第7号に発表した。これは30年来、魯迅

を読み続け考え続けてきたレポートの一部である。本書が出た同じ2010年に私は、竹内好『評伝・毛沢東』とこれをもてはやす丸川哲史や孫歌らを批判した。本書と出会って、階級的に連帯した内容で竹内好批判をしていた仲間に出会えたという強い喜びを私はいま、強く感じている。

以下に、私が2010年にブログ「^{ほんほん}繡蟠録」に書いた竹内好『評伝・毛沢東』批判を資料として掲載し、本書への連帯の意思表示とする。

毛沢東思想の歪曲を批判する (2010/01/31)

丸川哲史さんの新刊『ポスト〈改革開放〉の中国』（作品社、2010年1月）は、かかる時期に問題にしてい。〈改革開放〉の現代中国を理解するためには革命戦争から文革にいたる歴史への理解が必要であるとの指摘には賛成だ。しかし、その内容には同意しかねる。

丸川さんは、竹内好を引いて「純粹毛沢東」をキーワードに現代中国を分析しようとする。竹内は『評伝毛沢東』他で「無から有を生み出す」のが毛沢東思想の「根本であり、原動力」と強調している。本当か。

「純粹毛沢東とは何か。それは、敵は強大であって我は弱小であるという認識と、しかも我は不敗であるという確信の矛盾の組合せから成る」（竹内好）だって？ これは毛沢東の哲学の「矛盾」とは似て非なるもの、こんなものは弁証法でも何でも無い。中国革命の歴史性と社会性への分析を抜きにした「不敗であるという確信」とはカルトでしかないではないか。

毛沢東は分析に基づき当時の中国では（と限定して）根拠地が存在し得ると判断し、革命戦争の事実で証明したのである。竹内のように「敵は強大」だが「不敗であるという確信」を持ってという主張を一般化すれば現在の日本やアメリカでも根拠地は存在し得ることになるし、「それ（根拠地）は敵の戦力によって自動的に大きくなる」（竹内）ことになる。何とおめでたいことか。

「無から有を生み出す」という俗耳に入りやすいキーワードで竹内好が言ったのは、結局のところ俗流唯物論であり、経済決定論でしかなかった。こん

な骨董品を持ち出して毛沢東思想を語るとは、丸川哲史さんも困ったものである。

[初出：繡蟠録 2010年1月後半 <http://www.teisensha.com/han/hanhan/hanhan1001b.htm>]

竹内好による毛沢東理解の卑俗さを批判する (2010/02/12)

1/31付で、丸川哲史さんによる竹内好を引いた毛沢東理解の誤りを批判したが、丸川さんは『竹内好 アジアとの出会い（河出ブックス 人と思考の軌跡）』（河出書房新社、2010年1月）でも「竹内好が毛の思想を扱った最も大きな仕事は、一九五一年の『評伝 毛沢東』である」として竹内の毛沢東理解を高く評価している。毛沢東思想に対するこれほどまでの歪曲がここまで繰り返されることを、「紅衛兵 2.0」としての私は看過できない。問題は第一に、竹内好による毛沢東理解にあり、第二に、日本の中国派の卑屈な作風にある。ここではまず竹内好による毛沢東理解を批判する。

竹内は『評伝』のなかで、とりわけ「七 無からの創造」「八 自己改造の問題」で毛沢東評価を強調している（丸川さんが礼賛し、さかんに引用しているのもこの部分である）。竹内は「原始毛沢東」として1927—30年の毛沢東をモデルにした。

井岡山の毛沢東は、ほとんどロビンソンだった。マルクスの編み出した哲学的範疇としてのプロレタリア、つまり無所有者だった。一切の所有者たりうべき無所有者だった。これまでのかれの生涯で得たものを、かれはすべてこのときに失った。かれはまず、個人生活を失った。外の世界との関連を絶たれた。かれは家族を失った。（中略）かれ自身の生命も、一度は失いかけた。（中略）かれは党生活も失った。（中略）要するに、一切が失われ、一切が原初からの再出発を要求した。〔『評論集』第1巻336-337頁〕

竹内による「無」の説明は、たとえばロビンソンであることが示すようにきわめて物質的なものである。個人生活や外との交通、家族を失ったといってもそれはゼロではない。事実は「無」ではなく、「欠乏」である。それを竹内は「マルクスの編み出した

哲学的範疇としてのプロレタリア、つまり無所有者」と直結させる。本当か。プロレタリアートが革命の主体になりうるのは、彼らが「鉄鎖以外に失うべき何ものももたぬ」存在ゆえ、すなわち哲学的範疇としての「無」とは世界を認識する主体としての立場を示す。井岡山の毛沢東がいくら貧乏でも「一切が失われ、一切が原初からの再出発を要求」しはしない。逆に毛沢東が哲学上の「無」の立場に立ち得たのは、それは「一切が失われ」たからではない。

竹内の毛沢東理解は、卑俗な唯物論であり、経済決定論である。人間の思想的な転換を単にその人の生活の物質的变化（一切を失った！）で説明しようとしているからである。井岡山以前の毛沢東は、あるいはまた権力奪取後の毛沢東は「一切を持っていた」ゆえに革命家たりえないということになるではないか。新島淳良がかつて「竹内氏の論は飛躍がありすぎ、それはあまりにも明治時代的身立出世譚のにおいがする。二宮金次郎的な発奮物語のにおいがする」と批判したが、これは竹内批判としての的を射ている。

竹内が持ち出すロビンソンとは何か。マルクスが『資本論』第1巻第1章の末尾で論じているが、ロビンソンこそイギリスの勃興期ブルジョアジーの精神を示す典型である。彼は孤島で回心する。しかし、毛沢東はロビンソンとは違う。井岡山以前も以後も、中国と世界の革命を企てていたのである。ロビンソンを持ち出したのは、竹内の小ブルジョア性を示してあまりある。

だがしかし、日本の左翼運動は、こんな骨董品を持ち出して毛沢東思想を語る丸川哲史さんをはたして嗤うことができるだろうか。日本の左翼は（藤本進治を除いて）いまだプロレタリアートとは何か、階級形成とは何かを理解し得ていない。組織に加盟することがプロレタリアートになることだという理解や、物質的な貧乏であるそのままの状態がプロレタリアートだなどという理解にとどまっているからである。革命は遠い。

毛沢東の矛盾概念について (2010/02/13)

1/31付、2/12付で、竹内好（と丸川哲史さん）による毛沢東思想の歪曲を批判したが、引き続いて彼

らの誤りを考えていきたい。

竹内好は「純粹毛沢東とは何か。それは、敵は強大であって我は弱小であるという認識と、しかも我は不敗であるという確信の矛盾の組合せから成る」という。「敵は強大であって我は弱小であるという認識」と「我は不敗であるという確信」との関係は“矛盾”と言っているのである。矛盾とは何か、ということは『矛盾論』の全体にかかわることであり、毛沢東思想の根幹にかかわることである。結論を先取りして言えば、こんなものは矛盾でも何でもなく、彼らがデッチ上げた毛沢東であり、竹内や丸川さんの頭の中にしかないものである。

矛盾とは単に差異ではない。毛沢東思想における矛盾概念とは、互いに排斥しあうとともに互いにそれ自身の他者であるような関係、すなわち互いに他を自己の存在の前提とする関係であること、さらに、一定の条件のもとでの相互転化ということがなければならぬのである。階級闘争という現実の矛盾の例でいえば、支配されていたプロレタリアートが支配する位置に転化し、支配していたブルジョアジーが支配される位置に転化するという相互転化が第一段階であり、第二段階はその対立する両方が消滅することである。

「敵は強大であって我は弱小であるという認識」と「我は不敗であるという確信」との関係は毛沢東思想でいう相互転化ではない。それは負債と財産との関係のごとく、同一の事実が立場によって違ってくるという主観的な転化にすぎない。竹内好や丸川哲史さんのような「半知識分子」は知ったかぶりして毛沢東思想と中国革命を語ろうとするが、主観のなかでの対立を矛盾と言いくるめている。調査研究に基づく客観の矛盾をとらえるためには、経験を一面的に絶対化する経験主義を排する必要があるのである。

【参考】前田年昭「滴水洞 001 63年哲学論文という先駆！」

続・毛沢東の矛盾概念について (2010/02/14)

では、日本の毛沢東思想者は、竹内好とその尻尾たちとちがって、毛沢東の革命戦争をどうとらえるのか。

竹内好とその尻尾たちが持ち出した中国革命の事実を毛沢東自身の言葉によって振り返ってみよう。毛沢東は1936年に、第二次国内革命戦争の総括として『中国革命戦争の戦略問題』を書き、「中国革命戦争の特徴はなにか」として次のように述べた。

大革命を一度へている、政治的、経済的に不均等な半植民地の大国、強大な敵、弱小な赤軍、土地革命——これらが中国革命戦争の四つの主要な特徴である。これらの特徴が、中国革命戦争の指導路線およびその戦略戦術上の多くの原則を規定している。第一の特徴と第四の特徴は、中国赤軍の発展が可能であり、また、敵にうち勝つことが可能であることを規定している。第二の特徴と第三の特徴は、中国赤軍が、急速に発展することが不可能であること、また、急速に敵にうち勝つことが不可能であること、すなわち戦争が持久的であること、しかもへたをすると失敗する可能性もあることを規定している。

〔『毛沢東軍事論文選』外文出版社、pp.126-127〕

さらに毛沢東は「敵が強大なこと」と「赤軍が弱小なこと」とは「するとい対照をなしている。赤軍の戦略戦術は、こうしたするとい対照のうえにうまれたのである」と強調している。竹内好とその尻尾たちがいう「敵は強大であって我は弱小であるという認識」と「我は不敗であるという確信」との矛盾なるものが、いかに主観主義に満ちた、観念の自己増殖にすぎないか、明らかであろう。思い込みもたいがいにして欲しい。おのれが弱小である事実を直視する勇気を持ってぬドレイ精神がここにある。魯迅読みの魯迅知らず、毛沢東読みの毛沢東知らずがここにいる。だが、日本の左翼運動は、こんな莫迦を嗤うことができるだろうか。つい40年ほど前、日本の反権力運動は勇猛果敢に闘ったが、当時、新左翼のほとんどの党派は客観的事実から遊離したところで「我は不敗であるという確信」を持ち出して「決戦」を呼号していたのである。

〔以上初出：緋蟻録 2010年2月前半 <http://www.teishensha.com/han/hanhan/hanhan1002a.htm>〕

(まえだ・としあき、本誌編集)

胡傑監督『林昭の魂を探して』字幕（その5）

土屋昌明 編訳

[前号からのつづき]

055

解説：5.19運動之后、仅有八千多人的北大，就有八百多人被打成右派。

解説：5.19運動後、8千人しかいない北京大学で、800人余が右派にされた。

056



陈爱文，林昭北大的同班同学，旅居法国，原北大《广场》编委之一。

陈爱文：在当时所有的右派都检讨了，陈奉孝有没有检讨我不知道，但谭天荣检讨了我知道，所有的右派都检讨了，就是林昭坚决不检讨，还敢在会上顶的就是林昭一个人。人家说：“你把你的观点讲出来”，林昭说：“我有观点就是人人要平等，自由、和睦、和藹，不要这样咬人。如果你们一定要这样干，那你们就干去！象这样的社会有什么好的，当然不好嘛。”她就是赤裸裸的对当时的政治生活表示反对。那时候我们都不敢，反正挨斗了只要自己检讨几句，快点过关那么就算了。

陳愛文、林昭の北京大学クラスメート、フランス在住、もと北京大学『広場』編集委員。

陳愛文：当時、右派はみんな自己批判させられた。陳奉孝が自己批判したかは知らないが、譚天榮は自己批判したのを知っている。右派はみんな自己批判だ。林昭だけがかたくなに自己批判をせず、会議で楯突いたのも林昭だけだ。「自分の考えを話せ」と言われ、彼女はこう言った、「私の考えでは、人は平等で自由で仲良くあるべきだ。このようにいがみ合うべきでない。どうしてもこうしたいなら、勝手にすればいい。そんな社会が素晴らしいわけがない、悪いに決まっている」と。当時の政治生活に赤裸々に反対を表明したんだ。あの時の私たちにはできない

ことだ。どの道つるし上げられるなら、二言三言自己批判して、さっさと関所を抜けられればよいから。

057

解説：在1957年开展的反右运动中，全国有55万知识分子被打成右派，占全国知识分子的十分之一还多。

解説：1957年に始まった反右派運動において、全国で55万人の知識分子が右派とされた。知識人の人口の10%超だ。

058

解説：1957年五、六期《红楼》合订本这样写道：从反右斗争开始，编辑部陆续作了组织清理工作，开除了全校著名的极右派分子张元勋、李任、林昭、王金屏。

解説：1957年の『紅樓』5・6期合併号にこうある、「反右派闘争が始まって以来、編集部は組織整理工作を行ない、本学で著名な極右派分子たる張元勳・李任・林昭・王金屏を除籍とした」。

059

解説：在狱中，林昭在给人民日报的公开信中这样写到：青少年时代思想左倾，那毕竟是个认识问题，既然从那臭名远扬的所谓反右运动以来，我已日益地看穿了那伪善画皮底下狰狞的罗刹鬼脸，则我断然不容许自己堕落为甘为暴政奴才的地步。

解説：獄中で林昭が人民日報社にだした公開書状に次のようにある、「青年時代の思想が左よりだったのは、認識の問題にすぎない。いまや悪名高き「反右派運動」以来、私は日に日にわかった、あの偽善の顔の下には獠猛な夜叉の顔があることを。だから自分が暴政の奴隷の地位に墮落するなんて絶対に許せなくなった」。

060

陆佛为，原中文系党支部书记，林昭新专与北大两界的同学，新华社资深记者。

陸仏為、もと中文系党支部書記、林昭の高校と大学でのクラスメート、新華社ベテラン記者。

陆佛为：林昭的认识能力，她看到的東西，坦率地说，反右期间，划右派跟我交谈，我都没敢吭声。她给我谈地很多，这话我都没给别人谈过。谈了很多，但是凭心而论，并不是她的识别能力特别高，这是常识，实际是常识，因为我们处于历史的低谷。常识就是反革命，实际上常识就是反革命，没什么了不起。

陸仏為：林昭の認識能力、彼女が見いだしたものは、率直に言って……反右派の期間に、右派が私に話しかけても口をきかなかつたが、彼女は私とよく話した。この件は誰にも言っていない。よく話したが、正直言って、彼女の認識能力が高いわけじゃない。あれはつまり常識なんだ、じつは常識だったんだ。私たちは歴史の谷底にいた。常識を語ることは反革命であり、単なる常識が反革命になってしまう、たいしたことじゃないんだ。



061

沈沢宜：整个反右派已经到了尾声了，几百个右派已经打出来了，一天偶然我到南校门外的海淀的小店吃早点，一撩开门帘看过去，林昭在那里吃早餐饭，周围都是北大学生，之间没法说话，她抬起头看我一眼，我也看了她一眼，就这样漠漠的，就这样对视了一下，这就是永别。绝对没想到这是最后的此生的诀别。

問：和以前认识的林昭有什么变化？

沈沢宜：我觉得比以前更加圣洁，更加圣洁，脸色苍白，严肃。一种圣洁的光辉。那是因为经受了这次所谓阳谋，所谓引蛇出洞，那种内心的创伤。

沈沢宜：反右派運動がすべて終わろうとしていたころ、何百もの右派が攻撃されていた。そんなある日、たまたま南校舎の外の海淀の食堂に朝食に入った。入口をあけて中をみると、林昭がそこで朝食を食べていた。周囲はみな北大の学生で、話はできない。

彼女は顔をあげてちらっと私をみた。私も彼女をみた。そんな感じで黙ったまま、一瞬見つめ合った。それが永遠の別れだったんだ。まったく思いもしなかった、それが今生の別れとは。

胡傑：以前知っていた林昭と何か変わったところは？
沈沢宜：以前よりもっと神聖な感じだった、神聖さが増していた。顔色は青白く、厳粛で、何か神聖な輝きがあった。あれは、「陽謀」、「蛇を穴から引きずり出す」というやつを経験し、それで心を傷つけられたからだ。

062



钱理群，北京大学中文系教授。

錢理群、北京大学中文系教授。

钱理群：她抱着理想来参加这个组织，她为了组织可以牺牲自己的东西。组织是这样的。但她又有良心，她有最基本的东西就是反对奴役，只要看到奴役现象她就要反对，包括对她自己的奴役她也反抗，这就构成了良心和组织性的矛盾。到57年反右以后她有个根本的变化，对这个政权的基本立场变化。她以前承认她拥护它，在这个前提下我提出我的批评，后来她发现她面对的不是一个个人问题，面对的是整个制度的问题，那么她思想就有了质的飞跃。她就是反抗极权，这一步是她反右迈出来的关键的一步。那么这一步就不是很多人迈得过来的。所以她后来就不一样了。

錢理群：彼女は理想を抱いて（共産党の）組織に参加し、組織のために自分のものを犠牲にできた。組織とはそういうものだ。その一方で彼女には良心もあった。最も基本的なことは奴隷化に反対すること、奴隷の現象をみると必ず反対した。自身を奴隷とすることにも反対だ。そこで良心と組織性の矛盾を来した。57年の反右派以後、彼女には根本的変化がおこった。この政権への基本的立場の変化だ。以前は政権を擁護することを承認し、この前提のもと自分なりに批判を出した。その後、自分が直面しているのは個人の問題ではなく、制度全体の問題だと気づいた。そこで彼女の思想は質的飛躍をとげた。全体

主義への反抗となった。これは彼女が反右派から踏み出した重要な一歩だ。この一歩を踏み出した人は多くない。それで彼女はその後変わったのだ。

063

林昭獄中手稿，原件是血书，后经林昭用钢笔誊抄。
林昭の獄中手記、原物は血書、それを本人がペンで写したもの。

林昭在狱中曾用血书写道：每当想起那惨烈的1957年，我就会痛彻心腹不由自主地痉挛起来。真的，甚至听到、看到、提到那个年份，都会使我条件反射似地感到剧痛。这是一个染满中国知识界和青年群之血泪的惨淡悲凉的年份。假如说在此之前处于暴政下的中国知识界还或多或少有一些正气的流露，那么在此之后确实是几乎被摧残殆尽了。

解説：林昭は獄中で血によって次のように書いていた、「あのむごい1957年を思うたびに、自然と腹の底から痙攣がおこってくる。本当に、当時のことを、聞いたり、目にしたり、話に出しただけで、条件反射のように激痛が走る。あれは、中国の知識界と青年たちの血と涙に染められた凄惨な年月だ。あれ以前には、たとえ暴政下でも中国の知識界には多かれ少なかれ正気が流れていた。ところが、あれ以後はほとんど根絶されたのだ」。



064

譚天榮，青島大學物理系教授，北大百花學社創始人之一。

譚天榮、青島大學物理系教授、北京大學百花學社の発起人の一人。

譚天榮：北大1958年的时候，用脸盆、肥皂沫打蚊子，消灭四害的时候，她打了一天蚊子下来，她跟我说：“心里一直在笑，笑这个疯了党。”这就是她。那个时候我们只感到痛苦，从来没有像她那样想这个党疯了。没那么去想。

譚天榮：北京大學は1958年、洗面器と石鹼粉で蚊

を殺そうとした。四害駆除のとき、彼女は一日蚊を殺してきて、私にこう言った、「心の中でずっと笑っていたわ、頭がおかしくなってしまった党のことがおかしくて」。彼女はそういう人だった。あのころは私たちは苦痛を感じただけだった。彼女みたい

解説：这个22岁恩格斯《自然辩证法》就烂熟于胸的北大物理系学生谭天荣被打成右派后，在北大右派劳动的苗圃和林昭相识相爱。

解説：この、22歳でエンゲルス『自然弁証法』を誦んじた北京大学物理学部学生の譚天榮は、右派にされてから、北京大学の右派労働苗圃で林昭と相思相愛の恋に落ちた。

譚天榮：对，我跟她相处，我们思维的类型不大一样。不是毛泽东的思想决定中国革命的进程，反过来，中国革命的进程决定了毛泽东思想的情况。而且我自己嘲笑自己了，我是马克思的原教旨主义，我这是说，这是马克思原来的观点，现在的观点在我看来都不是马克思的观点，马克思认为经济决定政治，决定上层建筑而且决定人们的思想。

譚天榮：そう、彼女とつきあったが、考え方はだいぶ違っていた。毛沢東思想が中国革命の進展を決定するのではなく、逆に、中国革命の進展が毛沢東思想の有り様を決定した。しかも、自分をあざ笑ったものだ。自分はマルクス原理主義だが、これがマルクス元来の考えなら、目の前の考えはどうみてもマルクスの考えではない。マルクスは経済が政治を決める、上部構造や思想まで決めると考えたのだ。

065

解説：毛泽东在上海干部会议的讲话中说，每一个城市都有一些右派，这些右派是要打倒我们的，对这些右派现在我们正在围剿。（毛泽东选集第五卷442页）

解説：毛沢東は上海幹部会議での講話で次のように述べている、「各地に右派たちがいる。彼らは我々の打倒を狙っている。我々はそれを討伐している」。（『毛沢東選集』第5巻）

066

解説：这是一张林昭在北京大学和物理系同学李雪琴的合影照片，照片的背后有一首诗，因怕惹祸，这首诗在那个年代，被照片保存者涂沫掉了。我只能依稀看出1957年10月23日致雪琴 林昭。

解説：これは、北京大学で物理学部の李雪琴と撮った写真だ。写真の裏に詩が一首、問題になるのを恐れ、この詩はあの時代、所持者によって塗りつぶされた。「1957年10月23日 雪琴へ 林昭」とかすかに読めるだけだった。



067

李雪琴，原北大物理系右派学生。

李雪琴、もと北京大学物理系の右派学生。

李雪琴：她啊，特别地热情，特别地关心人。那个时候我是湖南来的，穿的也比较丑，人也比较乡气，她把好看的衣服送给我，那个时候她知道我爱上了王国乡，他到茶淀（右派劳改农场）去了，早断了联系了，她把地址给我找到了，通上信了，她这个人非常机灵并且善解人意，但感情太丰富了，她要爱的就太爱，要恨的就太恨了，特别的极端，特别的走极端。我当时就预感到充满了火药味活不长，不枪毙就病死。她不要命啊，夜里气的睡不着觉，起来写诗哭啊，她们班人都知道她，跑到未名湖去哭啊，晚上去哭啊，她早就有情绪对共产党的政策早就有情绪，那诗都是喷出来的血，我们写不出来，没有感情都写不出来。

李雪琴：彼女は、情熱的で思いやりのある人だった。私は湖南から来たばかり、田舎者で見た目もダサイ。綺麗な服をくれたのよ。当時、私が王国郷のことを好きだと知って、王は茶淀（右派労働改造農場）に行かされ、連絡がつかなくなっていた。彼女は住所地を探してくれて、連絡がついた。頭がすごくよく気がつく人。でも感情が強すぎた。好きは大好き、嫌いは大嫌い。とても極端で、極端に走りやすい。当時から危険な臭いがして長生きできないと感じられた。殺されるか病気になるか。命知らずだった。夜眠れないと、起きて詩を書いて泣いていた。クラ

スの人は、彼女が夜中に未名湖に行って泣いているのを知っていた。夜に泣きに行くのよ。彼女は早くから共産党の政策に対する考えがあった。彼女の詩は噴き出した血によるもの。私たちに書けるものではない、あの強い感情がなければ書けるものではない。

068

解説：林昭在狱中写道：人们时常布置我不能喝到米汤甚至开水。于是我只好一口一口喝着拧在脸盆里的自来水。有时头晕得实在支撑不住了，因为在那期间，平均每天还要至少写千字上下的血书，可是小室中除了水，再也没有一点可吃的东西。镣铐下忍死苟延着的绝食者是这样活过来的吗？年青的反抗者那充满悲痛激情的血书的篇章是这样写出来的啊。

解説：林昭は獄中で書いている、「重湯もお湯も届かない所に置いてある。仕方なく一口ずつ洗面器にたまった水道水を飲む。ときどき頭がクラクラして倒れそうになる。この間に毎日千字くらい血で書かなければと思っているから。なのに部屋には水以外、口にできる物はない。手枷足枷のもと耐えて生きているハンスト者とは、こうして生をつなぐものなのか。若き反抗者の、あの悲痛と激情に満ちた血書は、こうして書かれたのだ」。

069

李雪琴：我给你讲，我跟共产党有不同的关系，有点不同，有点不一样，我是农村生长的，我就死咬定毛泽东是代表农民的利益，她就没有这个思想，她一直是上海的贵族生活，她衣服都送到洗衣店去洗，平常礼尚往来，你看她有纪念册，还有诗人给她提词，完全是俄罗斯贵妇人，我们见都没见过，她什么书都看过，她真是代表了中国先进的资产阶级，这无产阶级革命她不接受，她不接受，她要恨到那个地步。而中国当时，中国当时进行无产阶级革命的尝试，进行尝试是成不了功的，她了作为代表资产阶级绝对民主、自由来反抗遭到灭顶之灾。很明显就看出来，就是这么一回事。这个无产阶级革命多残酷啊，经过几十年失败不搞了，所以说她要唱国际歌，她要讲马克思主义什么的，他讲错了，不是的，她就是代表中国

先进的资产阶级，但先进资产阶级成功不了阿，掌握不了权啊，你看秋瑾不就也是死了吗，孙中山他们，为了中国的自由、民主，为了今天这样的日子，死了多少人，她就是一个。我们那时比较无知，徘徊在资本主义与社会主义之间，不太清楚，所以就活下来了。是这么回事，知道吧，不象她那么纯粹。

李雪琴：共産党と私の関係は彼女と少し違っていた。私は農村生まれだから、毛沢東は農民の利益代表だと言い切っていた。彼女にはこの考えがない。彼女はずっと上海の貴族生活だ。服だってクリーニング店で洗っていた。普段から社交があって、写真アルバムもあるし、詩人も彼女に詩句を捧げる。まったくロシアの貴婦人みたいだ。お目にかかったことすらない本を、彼女は何でも読んでいる。先進的資産階級の典型だ。プロレタリア革命は、彼女には受け入れられない。受け入れられないから、あれほどひどく憎んだ。でも当時は、プロレタリア革命の実験だから、実験はうまく行かなかったが、彼女は資産階級の絶対的な民主と自由のために反抗して災禍に遭った。そういうことだったとはっきりわかるでしょう。あのプロレタリア革命の残酷なこと。何十年もかけて失敗に終わった。だから、彼女がインターナショナルを歌ったり、マルクス主義とかを語ったりするのは、間違いだったのよ。そうじゃない。先進的資産階級の典型なのだから。しかし先進的資産階級はうまく行かない、権力を持ってない。秋瑾も死んだでしょ。孫文たちも。自由と民主のために、今日このような日々のために、どれだけの人々が死んだことか。彼女もその一人。私などはあそこ無知だったから、資本主義と社会主義の間をウロウロして、わけがわからなかった。だから生き延びた。そういうことなのよ。彼女みたいに純粹じゃない。

070



甘粹，原中国社会科学院文学所资料室主任。

甘粹：もと中国社会科学院文学研究所資料室主任。

八哥鸟叫：小姐好，小姐好。恭喜发财，恭喜发财。

九官鳥の鳴き声：おねえちゃん、元気？儲かるよ、儲かるよ。

歌：在暴风雨的夜里我怀念着你，窗外是夜，怒吼的风，淋漓的雨滴，但是我的心那，飞出去寻找你

歌：暴風雨の夜に、あなたを思っています。窓の外は夜の闇、怒号のような風、淋漓たる雨のしずく、でも私の心は、あなたを探して飛び立つ。

林昭音乐作品《呼唤》(1958年作于北京)。

林昭の音楽作品『さけび』1958年北京での作。

林昭歌曲稿(甘粹提供)。

林昭の歌曲原稿(甘粹の提供)。

解说：在反右运动的后期，林昭写下了这首歌曲，这也许是中国现代史那场最重要的反右运动中留下的唯一一首不同声音的歌曲。

解説：反右派運動の後半、林昭はこの曲を書いた。現代史で最重要な事件、あの反右派運動において残された唯一の異質な曲であろう。

北京铁狮子胡同三号，中国人民大学书报资料中心。
北京鉄獅子胡同3号、中国人民大学図書・雑誌資料センター。

解说：打成右派的林昭没有被送往农村，而是被系主任罗列先生照顾安排在人民大学书报资料室劳动改造，在这个资料室中还有另外一个为凑名额而打成的右派叫甘粹。

解説：林昭は右派にされたが農村には送られず、学部長だった羅列氏のおかげで、人民大学図書・雑誌資料室で労働改造となった。この資料室にはもう一人、帳尻あわせて右派にされた甘粹がいた。

甘粹：平常也是一块进一块出，一个男的一个女的这样进进出出，人的眼睛就有反映了，组织上就找我谈话，说你们俩两个右派不能谈恋爱，所谓恋爱啊不是我们俩自己…用现在的话说：建立恋爱关系，不是，而是组织上给我们按下来的，按下来，本来还没有这个关系的，这一说反正弄假成真了，越不准我们谈恋爱，她的性格和我的性格，俺们越谈给你看，咱们有意识的手拉着手，那个时候挎着，在那个时代跟现在

不一样, 男的女的挎着, 在人民大学校园里走着给他们看。

甘粹: 出勤も退勤も一緒だった。男と女がいつもこうしていると、人目につくものだ。組織が私をつかまえてこう言った、「おまえら右派の恋愛はだめだ」と。恋愛と言ったって、自分たち二人が——今なら恋愛関係を結ぶという——そういうのじゃない。組織が私たちをそう配置した。そうしたから、もともとそういう関係じゃなかったのに、それが嘘から出た真で、恋愛するなと言われれば言われるほど、彼女と私の性格だから、俺たちはもっと見せつけてやろうと、意識的に手をつないだり、当時は腕組みだ、今と違って、男女が腕組みしながら、人民大学のキャンパスを歩いて見せつけた。

林昭和甘粹の合撮影照片。

林昭と甘粹のツーショット。

解説: 在这里林昭完成了海鸥之歌和普罗米修斯受难日两首长诗的创作…。并且每个星期天都带甘粹去王府井教堂做礼拜, 给没有一点基督教知识的甘粹讲圣经的故事。

解説: ここで林昭は「かもめの歌」と「プロメテウス受難の一日」を創った。そして、毎日曜に甘粹をつれて王府井教会で礼拝し、キリスト教を知らない甘粹に聖書を物語った。

071

原新闻片资料: 1958年大跃进, 大炼钢。

もとのニュース映像: 1958年 大躍進、土法高炉。

促进生产发展和集体主义思想成长———农业社办食堂一箭双雕。

生産の発展と集団主義思想の成長を促進……農業社の食堂経営は一石二鳥。

新疆小麦空前大丰收、宁夏地区估计可比去年增产八成。

新疆の小麦が空前の大豊作、寧夏地区は昨年比で八倍。

大锅饭。

大釜のメシ。

072

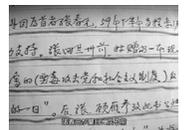


甘粹: 那时候结婚要通过组织批准, 批准了你, 你拿着介绍信才能去婚姻登记。结果我去办的时候得到一句什么话呢? 党总支书记说: 你们两个右派还结什么婚呢! 因为我们谈恋爱他管了, 我们没理他, 而且反抗得更强烈, 所以这样肯定的, 咱们不可能结婚, 没办法嘛, 他不批嘛。

甘粹: 当時、結婚には組織を通して許可が必要だった。許可をもらって、紹介状を持って行かなければ婚姻届を出せなかった。私が紹介状をもらいに行ったら、何と言われたと思う? 党総支部書記はこう言った、「おまえら右派が結婚とは何事だ!」と。彼の管轄下で恋愛して、彼を無視した。というよりかなり反抗していた。だから、こうなるのは当然だった。結婚できない、許可がないんだから。

解説: 结婚被校方拒绝后不久, 甘粹被发配到了新疆农二师劳改营, 在那里他度过了地狱般的22年。

解説: 結婚が学校側から拒絶されてすぐ、甘粹は新疆の農二師勞改營に配置換えになり、そこで彼は地獄の22年を過ごした。



073

上海

上海

解説: 林昭离开北京回到上海母亲身边医病, 她还经常回苏州老家, 在那里她开始重新认识了自己的父亲, 并常常和他彻夜长谈。在这一期间她结识了因读了“海鸥之歌”而从天水农村慕名而来的兰州大学历史系右派学生张春元和物理系研究生顾雁。在这份林昭案加刑的材料上说: “张回兰州前, 林赠予一本现代修正主义纲领草案及自己写的反动长诗“普罗米修斯受难日。”后张、顾参考此书公然提出“要在中国

实现一个和平、民主、自由的社会主义社会，”并将林的反动长诗编印在反动的《星火》刊物上”。

解説：林昭は、北京から上海へ戻り母親のもとで療養となったが、頻繁に蘇州の実家に戻った。そこで父親を再認識するようになり、よく徹夜で話しこんだ。このころ、「かもめの歌」を読んで天水の農村から林昭を慕って来た蘭州大学歴史系の右派学生の張春元と物理系の院生の顧雁と知り合った。この林昭の罪を記した書類にこうある、「張春元が蘭州に戻る前、林昭は『現代修正主義綱領草案』と自作の反動的な詩「プロメテウス受難の一日」を張春元に贈った。張春元と顧雁はこれらを参考に「中国に平和と民主と自由の社会主義社会を実現すべきだ」と公然と提示し、そして林昭の反動的な長詩を反動雑誌『星火』に発表した」。

074



顧雁、中国科技大学物理系教授1957年毕业于北大物理系《星火》刊物主要负责人。

顧雁：中国科学技术大学物理系教授、1957年に北京大学物理系卒業、『星火』出版責任者。

問：当時你们刻那些小册子的时候是冒着杀头的危险的？

顧雁：那当然，这是一清二楚的事情。我不是给你讲了吗，他（某教师）是正规的投稿到<红旗>杂志社，这是完全合法的事情，尚且要判你十年徒刑，我们这个当然…

胡傑：この小冊子を印刷したのは、当時では命がけだったのでは？

顧雁：そりゃそうだ、はっきりしている。さっきも話したが、ある教師は『红旗』雑誌社に正規ルートで投稿しただけで、まったく合法的なのに、懲役10年になるんだ、私たちも当然……

075

原新闻片资料与解说词：(1959年)10月1日是新中国十周年生日，首都天安门广场举行阅兵式，和七十万

人的游行大会，庆祝国庆十周年。1960年6月1日至11日召开了全国教育和文化、卫生、体育、新闻方面社会主义建设先进单位和先进工作者代表大会。一大批事迹突出、影响较大的先进单位和个人受到表彰。

もとのニュース映像とナレーション：1959年10月1日は新中国10周年記念、首都の天安門広場で閲兵式と70万人のデモ行進が、建国10年を祝った。1960年6月1日から11日まで、全国で教育・文化・衛生・体育・ジャーナリズムの社会主義建設先進単位および先進的労働者の代表大会を開催。抜群の成績で影響が大きい先進単位と個人が表彰を受けた。

人民日报：人有多大胆，地有多大产。

『人民日报』：人が大胆なら地は大豊作。

早稻亩产三万六千九百多斤。

早稲が3万6千900斤の生産。

076



張景中：中国科学院院士，原北大数学系学生右派。

張景中：中国科学院院士、もと北京大学数学系の右派学生。

問：当時怎样表现出来是大饥荒？

張景中：一开始我们在那劳动粮食是不限制的，因为工作非常辛苦，大跃进的时候，后来到了60年以后就定量了，每人每月六十斤，很快改成四十五斤，到后来不说多少斤了，就是说几个粮，比方说一碗粥一个粮，一个窝窝头一个粮。

胡傑：大飢饉はどんな感じでしたか？

張景中：はじめ労働の給食は無制限だった、大躍進のときで仕事がきつかったから。1960年以後は量が決まり、1人毎月30キロ、すぐに22.5キロになり、それから何キロと言わなくなった。いくつと言うんだ。たとえば、お粥1杯と穀物1つとか、コウリャン餅1つと穀物1つとか。

077

刘发清：原北京大学中文系右派，广州青年干部学院教授。

劉発清：もと北京大学中文系右派、広州青年幹部学院教授。

刘发清：60年春天，我们那里的农村到处都传来死人的消息，我所在的中学是在一个很小的县，一个县才四千人，附近就是农村所包围，晚上可以听见遍地的哭声。唉呀，饿得我肚子实在是不行了，后来唉，腿怎么肿起来了，我知道这也是饥饿性的浮肿，无药可医。

劉発清：1960年の春、うちの村では死者の知らせばかりだった。私がいた中学は小さな県にあって4千人しかいなかった。学校の周囲は農村だ。夜そこら中で泣く声が聞こえた。ああ、腹がへって何ともならない。そのうち足がむくみ始めた。飢餓性の浮腫だ、治療薬はない。

刘发清：1956年在北大（照片）。

劉発清：1956年に北京大学で撮影。

刘发清：1960年在甘肃礼县（照片）。

劉発清：1960年に甘肅の礼県で撮影。

078

王书瑶：经济学教授，原北大物理系右派学生。

王書瑶：経済学教授、もと北京大学物理系の右派学生。

王书瑶：男的如果这腿一浮肿了，这离死就不太远了。女的如果脸浮肿了离死不太远了。如果你不能控制，这个时候如果你不再控制，忍不住饥饿要喝水的话，就死的更快。

王書瑶：男は足に浮腫が出たら死が近い。女は顔に浮腫が出たら死が近い。この段階で何とか抑制しないと。このときに抑制できず、飢えを我慢できずに水を飲むと、すぐに死ぬ。

079

张景中：到最后人死了医生总要写证明吧，都是写什么心脏病、肝病，什么救治无效。

張景中：最後に死ぬば、医者は証明を書くだろう。心臓病とか肝臓病とか、治療も効果なかったと。



080

王书瑶：张景中那年差点死了。我管的队是休养队，还有病号队，他在前边那个房子我们在后的房子住，有一个大炉子生火，发现要死的，能够抢救的就给送过去，有的死的根本就不发现，夜里头突然就死了，把他（张景中）送去抢救去了，抢救用什么抢救呢？就是一点黄豆面一点红糖。

王書瑶：張景中はもう少しで死ぬところだった。うちの隊は休養隊で、病人隊もあった。彼は前側の部屋で私は後側の部屋にいた。大きなストーブがあった。助けられそうなやつはそこに送ってやる。気がつかないまま死ぬのもいる。夜中に突然死ぬんだ。張景中もそこに送って助けたんだ。どうやって助けたか。大豆麵と黒砂糖だけだ。

081

张景中：一般病人的特点，直到死一般都不发烧，都是温度低。还有一个特点，直到临死之前胃口都还好，还想吃东西，都是这样子的。

張景中：病人の特徴はふつう、死ぬまで熱を出さず、体温が低い。もう一つの特徴は、臨終まで食欲があり、何か食べたがる。みんなそうだ。



082

刘发清：正在我的日子难过的时候，林昭从上海给我寄一封信来，那是60年的春天，寄了封信来我拆开，写了两张纸，后面有一个小包，另外有个小纸包包掉到地下，唉，我看见这个纸包包拣起来一看，一拆开，一张粮票，两张粮票，三张粮票，四张粮票七张粮票，每张都是五斤五斤的全国通用粮票。啊！我见到粮票，当时我眼泪就流下来了，太感动我了。后来

我才看信，信说，大意是这样：我知道你很困难，我也很困难，但是我很瘦，而且吃得很少，因此把过去节约下来的这一点粮票寄给你。所以当时我接到林昭（信）我确实哭了一场。后来我给她回信了，当然很感谢她。信后也每次都写上希望你好好改造，早日摘掉帽子，回到人民的怀抱。后来她又给我回信了，大意是这样，她用文言文写的：我与足下同舟人也，舟要靠岸吾亦可登。这个两句我记得特别清。

劉發清：食べ物に困っていたとき、上海から林昭が手紙をよこした。あれは1960年の春だ。手紙が来て封を開いたら、便箋2枚と、中に小さな包み、それと小さな紙袋が下に落ちた。おやっと思って紙袋を拾うと、中を開けてみた。配給券が1枚2枚3枚4枚……7枚だ。1枚2.5キロの全国通用食糧配給券。ああ、配給券を見て涙が出た。感動した。しばらくして手紙を読んだ。こう書いてあった、「大変でしょう。私も大変です。だけど私は痩せてて小食だから、節約した配給券をわずかながら差し上げます」。林昭の手紙を読んで、しばらく涙が止まらなかった。そして返信してお礼を述べ、最後にいつものように「どうか自己改造に努めて、右派から人民に戻ってくれ」と書いた。林昭から返信が来て、こう古文で書いてあった、「われ貴殿と同舟、舟が岸につけば吾も登るべし」と。この二句は忘れたい。

083

林昭在监狱中悲愤地写道：1958年之人民公社好以及在所谓大跃进之旗号下的诸般乌搞，特别是农业的破坏，农村的行政劫掠，与农民的彻底贫困化等等，那显而易见，是在独夫出自赌鬼本性的，荒谬乖舛的冒险决策之下所导致。

林昭は獄中で悲憤して書いている、「1958年の「人民公社はすばらしい」と「大躍進」などのキャンペーン下でおこなわれたデタラメ、とくに農業の破壊、農村行政による略奪、農民の徹底的な貧困化などは、明らかに、暴君の非人間性から出た、荒唐無稽な冒険主義の結果だ」。

084

解说：这是一本研究1959年到1961年中国人口的专著，名叫《大饥荒》。作者是复旦大学历史地理研究中心曹树基教授。他的研究表明，在三年大饥荒中全国非正常死亡人口达到3245.8万人。

解説：この本は、1959年から1961年の人口研究専門書、書名は『大飢饉』、著者は復旦大学の歴史地理研究センター曹樹基教授。この研究によると、3年の大飢饉で非正常死亡者は3千2百45万8千人に及ぶ。

085

劉發清：好，这三十五斤粮票作用可大了，每天就加半斤，多一两都不能加，每天拿半斤粮，就在学校买半斤做好的玉米面馒头。三十五斤加过去，已经加了七十天，那时候差不多已经夏天，多少有点菜了，有点萝卜，有点什么东西了，我们的生活可以说有一点点改善。我的灾难就渡过去了。

劉發清：この合計17.5キロの配給券はありがたい。毎日決まった量だけ使う。250グラム分きっかりだ。毎日250グラム、学校で250グラムのトウモロコシ馒头を買う。そうすると70日分になる。その頃には夏近くになっていて、食べ物がいくぶん増えた。大根とかが出てきた。暮らしが少しは改善されたといえる。こうして危機を切り抜けたんだ。

086

問：最荒唐才会饿死人，你们当时有没有去思考？

王書瑤：没有。当时只有活命一个想法，只想我怎么活命。我如何保养自己，如何节约自己的体力，如何充分利用给我们糠啊菜啊，这些东西把自己活（下来）。因为答案已经很清楚了，我早就说过这个话，对这个事实早就论证过了这个问题。那么现在到这种程度哪有什么可说的呢？

胡傑：政治的デタラメで餓死者が出たと当時考えた？

王書瑤：いや、当時は生きていくので精一杯だったから、いかに命を保つか。いかに養分を取るか、いかに体力を温存するか、配給の糠や菜っ葉をどう利用するか、それでどう生きのびるかだ。答えははっきりしていたから、私はずいぶん早くにそういう話

をしたし、この事実について問題はとくに証明されている。こんな状態にまでなって、いまさら何が言えるというんだ？

087

刘发清：再通一两封信以后，我再寄，她再也没有回信，我也不知道什么情况。我也不断给她写信，她也再也没有回信，当然我心里也知道，可能她出事了，但出什么事我没有把握。

劉發清：それから少し林昭とやりとりしたが、手紙を出しても、もう返事が来なかった。どうしたのかわからなかった。何度も手紙を書いたが、返事はいっこうなかった。心の中では気がついていて、彼女に何か起ったんだと。しかし、何が起ったかはわからなかった。

088

解説：1960年10月、天水参与《星火》地下刊物の右派与当地群众30多人遭到捕杀。同时顾雁在上海被捕，判刑17年，关押20年。林昭在苏州被捕。林昭的父亲知道女儿被捕后自杀，张春元逃脱，几年后被捕，并枪决。至今我们没有找到张春元一张照片。

解説：1960年10月、天水で地下刊物『星火』に関わっていた右派と現地の30数人が逮捕あるいは殺害された。同時に顧雁も上海で捕まり、17年の刑で20年拘禁。林昭は蘇州で逮捕。林昭の父は娘の逮捕で自殺。張春元は逃走後、数年後に逮捕銃殺。張春元の写真は1枚も見つかっていない。



089

譚蟬雪，敦煌研究院研究員，張春元の未婚妻，因参与《星火》判刑十四年。

譚蟬雪、敦煌研究院研究員、張春元の未婚の妻、『星火』に関わって14年の懲役。

胡：你能不能描述一下张春元是什么样子？

譚：很敏锐看一些问题。看问题很有些独到的见解。

他的个子稍微比我高一点点，个子不高。人啊，他的特点眼睛特别炯炯有神，好像是眉心当中有一颗痣。

胡傑：張春元はどんな感じの人だったか教えてもらえませんか？

譚蟬雪：鋭い観察力のある人。問題について独特の見解を出す。私より少し背が高いが、それほど高くはない。特徴は、炯々と輝く瞳、眉間にあざがあった。

090

解説：一位不愿透露姓名的人给我们提供了招致这些人被捕、被监禁、被枪决的那份《星火》刊物的目录。

解説：ある匿名希望の人が、彼らを逮捕・監禁・死刑に追いやった『星火』の目次を見せてくれた。

091

譚蟬雪：现实教育了我们，也现实把我们推到了这一步，我觉得是就这么个情况。这个东西也不是凭空我们自己产生出来的，对吧。如果说开始反右是很简单的，老百姓有这么一个反映，大家聊一聊，结果一下我们就成了右派。成了右派到还问题不大，到了农村以后，我们实际接触看到了农民的生活，农村的情况，说实在的我们说现实把我们真正推到了右派。我们觉得我们是真正代表农民的。农村里面干部的那种浮夸，唉！真是！不是经常参观亩产多少，放什么卫星对吧。拍的照片也是真的很，看起庄稼茂盛的很，我们就看到庄稼怎么来的，连夜把老百姓动员起来，把那些苞谷全部移植到一块地里面，啊哟！第二天来到以后真是茂盛的很，参观完了以后就乌乎哀哉。

譚蟬雪：現実が私たちを教育し、現実が私たちにその一步を踏み出させた、そういうことだと思う。このことは独力で生み出したことではない。反右派が始まったのは簡単な話で、人々がそれに答えて、話し合い、けっきょく私たちを右派にした。右派になったのはまだそれほど大きい問題ではなく、農村へ行ったあと、実際の農民の生活、農村の状況に触れて、正直言って、その現実が私たちを本当に右派にさせたのだ。自分たちは真に農民の代表だと思ったものだ。農村幹部の軽薄さといったら、本当にひと

い。収穫の視察なぞろくにしもせずに衛星の打ち上げとか何とか。収穫が多い様子の写真もホントらしく、収穫物が盛りだくさんのようだったが、収穫物がどこから来たか私たちは見た。みんなを毎晩動員して、全部を一面の土地に植え直すんだ。それで、翌日は幹部が来れば大収穫で、幹部が帰ればおしまい。

胡：你能不能描述一下这个《星火》到底是一个什么样一个刊物？多厚？

谭：就是，就是八开吧。八开这么大。

胡：就是这么一张纸？

谭：不是一张，就这么大的八开印的，第一页嘛是有个刊头，然后下面呢，都是一张一张的，就像报纸。没有装订。

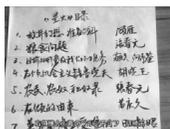
胡傑：『星火』はどんな雑誌だったのですか？

譚蟬雪：8頁でこのくらいの大きさ。

胡：こんな感じの1枚？

譚：この大きさと8頁、はじめにタイトルがあり、あとは1枚ずつ、新聞みたいに、綴じてない。

092



解説：在《星火》の目录中一共有七篇文章，第一篇：放弃幻想准备战斗——顾雁，二：粮食问题——张春元，三：目前的形势及我们的任务——苗庆久、向承鉴，四：右倾机会主义赫鲁晓夫——胡晓愚，五：农民、农奴和奴隶——张春元，六：右倾的由来——苗庆久，第七篇是林昭的长诗，普罗米修斯受难的一日，全诗共363行。诗中这样写到：……如果他必需以鹰隼的牙爪，向囚徒证明胜利者的光荣；那么笑吧，握着雷霆的大神，宙斯，我对你有些怜悯；啄吧，受命来惩治我的兀鹰，任你们蹂躏这片洁白的心胸，牺牲者的血肉每天都现成，吃饱了，把毛羽滋养得更光润……鹰隼啄食了你的心肺，铁链捆束着你的肉身，但你的灵魂比风更自由，你的意志比岩石更坚韧。

解説：『星火』の目次には7篇の文章、幻想を放棄して戦闘に備えろ—顧雁、食料問題—張春元、現在の形勢と我々の任務—苗慶久・向承鑑、右傾機會主義のフルシチョフ—胡曉愚、農民と農奴と奴隸—張春

元、右傾の由来—苗慶久、そして林昭の詩「プロメテウス受難の一日」全363行。詩にはこうある、「……もし鷹の爪と牙によって、囚人に勝利者の栄光を明示するなら、笑おう、稲妻をも握る神ゼウス、おまえを哀れんでやろう。ついでに、命令を受けて私を責めにくる秃鷹め、この潔白な心臓を思うがまま。犠牲者の血と肉は日々にもたらされ、食いあき、おまえらの羽はさぞかし光沢を増すことだろう……鷹が胸をついばみ、鎖が肉体をさいなもうとも、魂は風よりも自由に、意志は岩よりも硬い」。

093

問：当你们都预料到有这样一个结果？

顾雁：但是觉得不做不行，总要有人出来。如果一个民族到没有一个人出来了，这个民族就没有希望。总要有人，第一个人，鲁迅讲总要有第一个人出来喊啊！

胡傑：こんな結果を予想していましたか？

顧雁：やらなければと思った、誰かが出てこない。もしこの民族にひとりも出てこなかったら、希望はなくなる。誰かが、始めの人が必要だった。誰かが出て叫べと魯迅も言っただろう！

094



解説：林昭在獄中写道：每当我沉痛悲愤地想到，那些自称为镇压机关或镇压工具的东西，正在怎样地作恶，而人们特别是我们同时代的人，中国的青春代，在这条专政的大毒蛇的锁链之下，怎样的受难，想到这荒谬的情况的延续，是如何断送民族的正气和增长着人类的不安，更如何玷污着祖国名字而加剧时代的动荡，这个年青人还能不急躁吗？

解説：林昭は獄中でこう書いている、「悲憤のなかでいつも考えてしまう、鎮圧機関とか鎮圧道具と自称するものは、いまだどれだけ悪事をなしているか。私たちの時代の人々、青春時代の若者たちは、この専制政治の毒蛇の鎖の下で、どのように受難しているか。こんなデタラメな状況が続いたら、どれほど民族の気は絶たれ、人類の不安は増長することか、

ましてやどれほど祖国の名誉を汚し、時代の混乱を増すことか、それを考えたら、一個の若者として焦らずにおられようか！」

095

解説：1962年3月，因林昭在獄中病情严重，林昭的母亲属统战对象，又因为《星火》的主要负责人张春元还没抓到，公安局采取了一种诱捕张春元的手段，同意林昭保外就医。

解説：1962年3月、林昭の獄中での病状は悪化、母親が戦前以来の統一戦線対象（革命貢献者）に入っており、またその時『星火』の中心人物だった張春元が逃走中だったため、公安は張春元へのおとりとして、林昭の保釈治療に同意した。



096

許覚民，原中国社会科学院文学所所长(林昭の堂舅)。

許覚民、もと中国社会科学院文学研究所所長（林昭のおじ）。

許覚民：要她保外就医，她不出来。（她妈妈）拉她出来，她就拉住监狱里面的椅子不肯走。她说：多此一举。她看透了：你以为把我保出来吗？还要把我抓进去的，何必多此一举。她不肯走：我要坐穿牢底斗争到底，她不走。就是这样一种血性的勇气。后来，她妈妈许宪民就派了一个力气大的人把她硬抱出来拉回家的。

許覚民：保釈治療させようとしても、彼女は出てこない。母親が引っ張っても、監獄の椅子にしがみついて出てこない。余計なことだと言う。彼女にはわかっていて、自分を保釈するって？また捕まえて入られるんだ、余計なことをする必要はない。そう言っ出て出ない。牢屋で徹底的に戦うんだと、出てこない。犠牲の血を流す勇気だ。あとで母親の許憲民は、力持ちを遣って彼女を抱きかかえさせて家に連れて帰った。

097



解説：保釈出獄的林昭回到了老家苏州，在这里她结识了刚从劳改农场释放回来的右派黄政。

解説：保釈された林昭は蘇州に戻り、そこで知り合ったのが労働改造農場から戻ったばかりの右派の黄政だった。

黄政，原志愿军排长，现退休干部。

黄政、もと志願軍隊長、いまは退職幹部。

黄政：那时我跟林昭讲：苏州是天府之国，鱼米之乡，里弄的老妈妈老头浮肿啊，吃豆渣，酱油汤，这个地方从来是养人的生人的天堂的地方。

问：他们都是有是饿的？

黄政：，饿的！没有东西吃啊。1961年的冬天，在农场我们每天要起来抬死人，抬出去埋，每天不是一个两个，那些四、五十岁的小学教师，小学校长，知识分子是抗不过来的，倒下就倒下了。

黄政：あのとき林昭と話した、「蘇州は天国、魚と米の里と言われるのに、近隣の年寄りも浮腫だ。豆かすや醤油を薄めて飲んでいる。ここはもともと養生の天国だったのに」と。

胡傑：蘇州でも飢餓が？

黄：飢えだよ。食べるものがなかった。1961年冬、農場では毎朝起きては死者を埋めた。埋めたのは、毎日1人2人じゃない。4・50歳の小学教師や校長などインテリは耐えられない。倒れたらおしまいだ。

解説：黄政1950年参加志愿军入朝作战，1955年因家庭成份不好而离开军队，1957年打成右派在江苏省滨海农场劳改，1960年在农场专门负责埋葬病、饿而死的劳改人员。

解説：黄政は1950年に志願軍で朝鮮戦争へ、1955年に出身家庭が悪くて除隊、1957年に右派にされ江蘇省の浜海農場で労働改造をした。1960年に農場で病氣や飢えで死んだ者の埋葬を専門に担当。

〔(4)ページにつづく〕